

## 東京医学講習所、東京医学専門学校開校に至るまでの経緯

日本医学専門学校は長谷川泰により創設された済生学舎が経営困難となり、山根正次により引き継がれて明治45年（1912）に設立された私立医学校である。設立者の山根正次は朝鮮衛生調査官として朝鮮に滞在することが多く、その経営は部下の磯部検三に任されていた。当時日本医学専門学校の設備は貧弱で、医師国家試験を受けずに医師資格を得られるという無試験指定校を文部省より認可されるにはほど遠いものであった。磯部検三は学生達に卒業時には無試験指定校の認可がおりると約束していたが、大正4年末になつても文部省の指定校認可は得られなかった。卒業を控えた医学校四年生を中心とする学生達は設備の改善と山根、磯部両理事の辞任を求めて血判状を作成した上でストライキに入つた。このようなストライキが翌大正5年4月末まで続いた。5月1日の学生集会で新一年生が血判連署して学生団に加わつたことから、ストライキは新たな局面を迎えた。5月3日には学生団は時の文部大臣、高田早苗に嘆願書を提出した。これに対して日本医学専門学校側は5月4日に13名の学生の処分を行った。学生団は毎日学生会議を開くが、学生の保証人会も学生を支持し、大きな社会問題となつていった。5月16日に四百数十名の学生達は13名の処分学生に殉じて日本医学専門学校より同盟退学することとなつた。学生団はその晩に神田青年会館において第一回の公開演説会を開催し、窮状を社会に訴えた。長青年は学生団の支援者を求めて広島県出身の有識者を尋ねてまわることになつた。訪問先は花

井卓三から、尼子四郎、そして高橋琢也へと広がった。同盟退学した学生は新たに学生団と学生後援会を組織した。5月末には頭山満を筆頭に23名の支援者が学生後援会に加った。長青年が6月2日に高橋琢也を訪問したことから、高橋琢也の全面的な支援を得ることとなった。その結果、学生団への支援は新たな局面を迎えることとなった。6月9日には長委三美は佐藤進男爵を訪問し支援を得たのである。翌日の夜前に島根県出身の学生2名が森鷗外を訪れ(森鷗外日記)、医学界の支援を得ることとなった。これまで明らかでなかった森鷗外や、鷗外の同級生中濱東一郎、佐藤佐、鷗外の上司であった石黒忠恵らの強力な応援が本記録には示されている。7月4日には高橋琢也、寺尾亨らが学生集会に出席し学生の為に尽力することを述べ、さらに7月15日には新たな医学校を設立することが高橋らにより学生に明かにされた。文部省はこれを認可することとなった。その後の展開は急速なものであり、医学界をはじめ各界の支援を得て、9月11日に寺尾亨の兄、寺尾寿が校長であった東京物理学校において東京医学講習所が開設された。講義は東京物理学校内で、臨床実習は順天堂病院(佐藤進男爵が病院長、佐藤佐博士が副病院長)および回生病院(中濱東一郎が病院長)で行われた。学校長は佐藤進男爵の嗣子佐藤達次郎であった。その直後、学校設立資金の提供予定者であった秋虎太郎が病気のため東京医学講習所主幹を辞任したことから、経営に行き詰る状況となったが、高橋琢也が全財産をもってこの事業を継続し、成就させた。その間、東大久保に購入した学校敷地に建築中であった新校舎が暴風雨により倒壊したことから、資金の調達は過酷を極めた。高橋琢也らの設立者と学生団が念願とした東京医学専門学校

への昇格は大正7年4月11日に認可された。さらに大正9年4月13日に無試験開業指定の認可が文部省よりおりた。東京医学専門学校が大学に昇格したのは昭和21年になってからである。

東京医学講習所の設立者(東京医学専門学校設立委員)(大正五年九月十一日)

大角桂巖 高橋琢也 福本誠 寺尾亨 秋虎太郎(東京医学講習所主幹)

東京医学講習所の顧問

中濱東一郎 佐藤進 森林太郎

東京医学講習所の担任教授

得能文(倫理学) 小宮豊隆(ドイツ語) 道部順(ドイツ語) 竹内作次郎(化学)

井上通夫(解剖学) 平光吾一(解剖学) 井上達一(生理学) 山川一郎(医化学)

清水茂松(薬物学) 古屋芳雄(細菌学) 緒方知三郎(病理学)

中濱東一郎(内科学) 田澤鎌二(内科学) 池上作三(内科学)

佐藤達次郎(外科学) 八代豊雄(外科学) 松井権平(外科学) 前田友助(外科学)

白木正博(産科学) 下平尚(婦人科学) 井上達二(眼科学)

須田卓爾(眼科学) 浅田一(法医学) 古屋芳雄(衛生学) 三宅鉦一(精神病学)

清水茂松(小兒科学) 栗本定次郎(皮膚科学) 千葉真一(耳鼻咽喉科学)

東京医学専門学校(大正七年四月より)

理事長 高橋琢也

校長 佐藤達次郎

理事 大角桂巖 寺尾亨

評議員 水野鍊太郎<sup>(注1)</sup> 石黒忠恵<sup>(注2)</sup> 神田鐮藏<sup>(注3)</sup> 野口遵<sup>(注4)</sup> ほか13名

主事 竹下文隆

(注1) 貴族院議員、のち内務大臣 (注2) 男爵。陸軍軍医総監、日本赤十字社初代総裁など歴任。(注3) 神田銀行設立。我国の証券業界の鬼才といわれた。(注4) 旭化成の創業者。我国の化学工業の祖といわれる。中橋徳五郎(大正七年当時、文部大臣)と同郷の金沢出身である。

## 読売新聞

諸君、幾多の将卒をモスコウの雪に埋めて悄然と引き上げたる征服者の悲愁ナポレオンの後姿如何に淋しきまた、如何にみじめであつたでしようか。

## 第一章 同盟退学と模索（大正5年5月）

大正5年5月3日

福原文務次官、松浦専門局長訪問

五月三日 吾々学生は引続き午前八時校内に集合、協議し結果高田文相宛の嘆願書を作成し、全生徒連名血判して午後二時九段牛ヶ淵公園より隊伍整然、文部省を訪う。嘆願書の内容。



## 嘆願書

謹而 文務大臣閣下に嘆願す。吾等日本医学専門学校生徒一同は本校指定問題に関し学校当局の誠意、毫も認むる能わず、將に第一回の卒業者を出さんとするに際し、尚指定を得る能わずは吾等五百余名の学生及び此れに関わる幾多の父兄の憂慮は今やその極に達し学生その堵に安じ学業に就く不能。伏而、閣下の裁決を仰ぎ我等刻下の窮状に対し此れが措置を執られん事をここに血判連署して嘆願す。

委員九名。余も共一人なりき。大臣は九州地方巡視不在のため福原次官・松浦局長に面会し種々陳情の上嘆願書を提出したるが、次官は「大臣不在中なり。今直ぐに御等の措置を執るを得ざれども諸君の意は諒として居れば今後も飽まで学生らしき態度を続けられんことを望む。」一時間余り陳情し、その報告を告げ諸委員は新聞クラブにて大概を話せし後引取る。

集まる部下、新聞記者十数名

中には新しき女新聞記者も見ゆ。

文部次官、福原僚二郎：文部次官をへて東北帝大総長。

文部省専門局長、松浦鎮次郎：愛媛県宇和島出身(明治十年一月十日～1945.9.28)東京帝大法学部出身。  
内務省、文部省専門学務局長、文部次官、九州帝国大学総長、貴族院議員、文部大臣を歴任。

大正5年5月6日

高島平三郎先生を西片町に訪う



五月六日。紛争につき、今夜六時より諸先生にご来校を願ひ今までの経過を報告し種々陳情してご同情を仰ぎたき目的にて、一年大橋君(註)と先生を訪う。

先生にその旨を達せしところ、「前約あるため出席し難し。しかし、余は生徒には同情する。学校の騒動は甚だ遺憾であるが、兼ねていってもおいたが、整々と学生の立場を何かしやつてることうれしく思う。私のみならず新聞の報ずるところ、かつ文部省の一員も堂々たる態度で陳情したと褒めていた。自分も前約なくば今夜も出席したいが、しかし余は今度のことも前々より詳しく知っている。今度の処分についても自分は教授会に欠席したため、如何なる人を罰したか知らんが、尚も教育者たるもの法例で制することは違つていふと思う。勿論、自分は今度教授会開かれて処罰云々があつたなら、十二分に

自分が意見を発表し、もし当局がこれを聞き入れてくれなかったなら余は断然学校と手を切る考えである。大体学校の経営は二人なくてはならぬ。私立の学校は誠に高度の学校になると政治的手腕のある人でなくては到底経営は出来るものではない。そして学監はよろしく人格ある教育者でなくてはならぬ。余はひとえにかかる意見である。しかし今となって磯部<sup>注2</sup>さんも学生がよせといってもよす事はせんだろ。それは各自となつて考えても分かることである。まして山根<sup>注3</sup>さんは然りである。彼は朝鮮顧問であつた。今は代議士で教育調査係をしてる勅任官だ。一体二人を引かして後はどうする考えか。破壊の前には Die Errichtung 建設がなくてはならぬ。まあそれは他言でして。諸君に願うのはあくまで一致団結して社会の同情を失わないようにして目的を達せられんことを望む。」

(注1)大橋虎太：日本医学専門学校1年生、宮城県出身。(注2)磯部檢三(日本医学専門学校理事)(注3)山根正次(日本医学専門学校理事)

高島平三郎：広島県福山市出身。誠之館中学(福山藩の藩校・誠之館)卒業。同窓としては、井上角五郎(後出)、藤井包総(後出)、永井潜(後出)、森戸辰夫、井伏鱒二、福原燐太郎らがいる。



大正5年5月13日

内閣秘書官山崎氏を永田町官邸に訪う

大隈宰相を午前七時に早稲田私邸に訪れしも宰相としては面会せず、私人としても生憎来客のため、面会せずとのこと。学生は教会委員十四名官邸を訪う。打栖知事上京にて忙のため、面会できず山崎秘書官に陳情す。

日は霞む春の夜を 岸辺の桜風に舞い

散りゆく花の乱れて 流るる河の水の面

棹さす笹舟 砕る日影

逝く笛さそう 花の浪

大正5年5月15日

日本医専学生大会場(根岸演芸座)にて保証人委員柔道五段・大角桂巖氏

「自分の体力の増進し、身体の發育完全に精神の哉快を叫ぶは、ただ精神の安神より来る。高島嘉郷先生、学生にひとえに曰く、人間は四十才にして身を立て、五十才までに社会に名を出すにあらざればそれ人物にあらず、過平凡者なり。四十才までは一心に学問に修養に多念あるべからずと。また曰く、世の中の人、兼備いうことはなきものにして学者は金なく、豪官は学なし。しかるに余は両備なし。余はひとえにこの言葉を聞き、夜更け静まる風に両に心さびしく、過去現在をつらつらと考えついに決心しぬ。まさに齡四十にならんとす。五十才までに名を世に出すにあらざれば余は四十九才の12月30日には概然として自殺せんと。かくも決心したるものの、年とともに何年すれば余は灰とならん、死せんと不安の念に、たえず心さびしくも感じました。しかるにふとしたる事より、動不動は生前に定まるべきものにあらず、死して後定まるべきにあり。彼の四十七士は如何。これよりして、もし吾人が目的に突進せばこれ感動なり。中途に志を排すや不成なりとされよう。安神して職務勉勵する事を得、今日の体格を得るに至れり。

故に大英雄も金錢も望まず、人は裸で生まれたる故、裸で死する覚悟である。かの谷中の墓地など行くと大石は草茫々、寒畑にうづまれど、その碑文すら見得ずなり。唯一人として業をつける人なし。大

石何の動かあらん。四十七士、乃木將軍の墓石少なしといえども、香火たゆる時なし。四十七士や實に山鹿素行先生の文筆の人格の賜なり。三百年すたれし小墓、ここに光を放つ。その寺聖之著明とはなりぬ。ああ正義の力、誠の存するところ大ならずや。凡て吾人は事をなすや、正義に向うところ敵なし。正義のためには一身を犠牲として事をなさざるべからず。死を覚悟せば如何なる事や出来ざるなし。余はひとえに事を成すや、死をかく付言ではありませんが、余はひとえに妻にいつて曰く、一体女というものは不安の多きものにて、夫立身すれば置き去られん。見捨てられんことを憂うものなり。故に余は一日言いて言いきかし、もし汝かく憂慮するならば余は教えん。もしかかる事ありしならば、汝はよろしく余を押し殺すべし。しこうして自分も死すべし。かかる勇氣なくば配するの要なし。長き間には殺するの時あり。かく申してより心に死を決めしか。憂うるの色を見ず、身神の健全と快哉を叫び居れり。万事安神立命は健々の要素なり。」

大角桂巖：柔道道場・大道社社長。日本医学専門学校学生の保証人であったことから、大正4年末以来学生のスライキを支援し、精神的支柱として大きな存在であった。東京医学専門学校開校の5名士の1人として尊敬された。柔道家であり、弘道館・加納治五郎より応援があったことが知られている。

大正5年5月16日

逋信省副參政官・荒川五郎氏を逋信省に訪う。五月十六日午前九時〜十一時

岡山県人、二年 小坂襄君(注)と同伴



「昨日、麴町に来てくれたそうだが(電、3300)夜が遅くなって失礼した。したがって血涙録も読んでいない。ちと大概を話してみてくれ。」

二人今までの経過を話すや、「それで大略承知した。両君が折角我輩に相談に来たのであるから我輩は両君のために相談に乗り、また方進のなき案のなき後援会のための案を示せよう。これはここだけの話で人には言ってくれるな。第一、苟も諸君が後援会を組織せんに案なきは遺憾である。我輩は五百の学生には最も同情するものである。学校を卒業し社会に出で、競争場裏に立つや甚だ難事たるにしかも貴重なる時間と金と労力を他に尽力せねばならぬというのは、諸君に多大の同情するものである。かくも思っているから、余は文部大臣に、次官に、參政官に指定云々を願うたこともあるくらいで、学生

の体面を明らかにし、建設の道に立つて来たるときは後援会以上の十二分尽力をしてあげる決心である。まず我輩は

一・磯部、山根(注)ら倅作の下で指定条件に欠損する箇条を充実し指定を得ること。要するに指定云々の問題からかくなつたのである。諸君が磯部、山根が誠意ないから排するなんて、これは人道として出来るものではない。よく考えてみよ。金をだしているのは誰であるか。その親を子が除かんとするに、かかる事は出来るものではない。また、磯部の人格云々が指定には関係あるものではない。もしかかるとを文部省が申せば大失態である。指定条件につきても文部省は必ず申すに違いない。大体今度のかかることが起こつたのは磯部に責任あるより以上文部省責任あるので大失態といわなければならぬ。もし此の第一案出来得ざるときは、

二・社会の同情を得て新たに設立すること。諸君が学生として静肅にして真の同情をもとめることである。我輩は社会問題とか何とか公開演説などは大不賛成である。破壊に破壊を重ねるのである。大破壊を計るのである。世は建設建設と努力するに大反対をやるのである。正義の叫びも社会の同情も水泡に帰し、笑いものにや事はすまないかと思う。今るとき演説なんて志ある人のすべきものではない。人をのせたるは演説で食つて行かう人はやるかしらん。かかる人に頼んだ方がいいと思う。五百の学生がきまじめにしておれば救う人は必ず出てくるのである。これは何時は撤兵の犠牲をみなければならぬ。

三・これは学生が静かにして同情を得ば全権を文部省に一任する事が出来る。

以上3案で、余は第一案に賛成すべきでいやしくも諸君が医学に志し、笈を負って上京したならばよろしく人の口になり、あるいはおだてらるべきではない。宜しく熟慮断行すべきである。正義の叫びも終局の瞬間に決すべきである。諸君は一致団結してあくまでも徹底したる方法により社会の同情を得て、目的を貫通されん事を望む。」云々。

(注1) 日本医学専門学校2年生、岡山県出身。(注2) 磯部検三(日本医学専門学校理事)(1872~1949)：山口県出身。山根正次の書生をへて、済生学舎を卒業。山根正次が明治45年に日本医学専門学校を設立するときに幹事となり、経営を掌握した。(注3) 山根正次(日本医学専門学校理事)(1857~1925) 山口県出身。長州藩医学校で蘭学を学び、のち東京帝国大学医学部卒業。森鷗外や中濱東一郎の1年後輩。法医学研究のためヨーロッパ留学。中央衛生会委員、警視庁警察医長をへて衆議院議員となる。立憲同士の党員。脚気論争では高木兼寛、北里柴三郎を支持した。明治42年には朝鮮衛生顧問となり、らい病院の設立に尽力した。明治45年に日本医学専門学校を千駄木に設立。

荒川五郎(1865~1944) 広島市出身。中国新聞主筆をへて、衆議院議員。逋信省副参政官。全国私立学校協合理事長、日本大学理事、憲政会政務調査会長など歴任。東京医学講習所開設に至るまで学生団を一貫して応援してくれた。

茅原崑山先生



「私は近ごろ大井の里でオゾンに満ちた南から吹き来る海の風に薫る緑の樹蔭に静かな努力を試みていましたが、日本医専の学生が殺到してこの静寂の生活を破りました。私は彼らが絶望的勇気を鼓して破壊に徹底せんとする態度に驚きました。

私と高田文相(注1)とは二十年來の交遊で白髪を戴ける先輩の間でもっともよく青年を解するものは高田氏であることを知っている。しかるにもし学生が高田氏を誤解し高田氏が学生を誤解して万一のことがあつてはならないと考えて学生側の委員十名が文相と会見する22日の払暁、院線(注2)で中央停車場で下つて久しぶりで東京の人となり直ちに小石川の最も高きところに高田氏を訪問し、その足で文部省に至り委員十名に会見し、さらに学生の決意の真所を福原次官、高田文相に伝えて駿河台鈴木町なる一元社の新事務所に引取りました。午後委員諸氏がみえましたから私は彼らに勧告するに、

第一…この問題で幾回と演説会を開くは決して得策でないこと。

第二…この問題は高田文相が公人として解決し教育界に閱歴ある私人として斡旋せんとを求むるのがもつとも穩当である。現内閣に反対する政党に趨、問題をして政党的色彩を帯ばしめてはならぬ。

第三…私から破壊に徹底せよということとは可能ない。相互讓歩して円満に妥協していただきたい。ということを以てし、保証人側の一人なる大角桂巖氏と協議の上、さらに本郷に医学博士(注3)青山胤通氏を訪問し二人にて交るがわる胸懷を披露し博士はこれを傾聴して下された。私はこの問題に関連して時代精神の何処へでも浸徹浸透しているのには今更ながら意外の感をなしたのである。高田文相および一般の識者が国民の前途につき更に徹底的、更に内的なる觀察と思索とを費やされんことを切望するものである。」云々

(注1)高田早苗(1860.4.4～1938.12.3)：東京出身。東京帝大文学部卒業。大隈重信とともに早稲田大学創立に貢献した。1907年には早稲田大学総長。大正5年当時、大隈内閣の文部大臣であった。(注2)東京駅の旧名(注3)青山胤通(あおやまたねみち)(1859～1917)：東京帝大医学部卒。同内科学教授。脚氣論争では森鷗外、石黒忠恵らとともに緒方正規博士の細菌説にたった。大正5年当時は東京帝大医学部医科大学長であった。



茅原廉太郎(1870.8.3～1952.8.4)東京出身。崑山は号。東北日報、山形自由日報(主筆)をへて万朝報新聞社に入社。海外特派員として米国へ出張。日本人として初めてアイスランドを訪問。万朝報主筆となるが、大正3年に退社し、執筆活動を行なう。大正5年8月15日に渡米し、2年間の海外生活。長委三美とは渡米3ヶ月前の出会いであった。長青年は、以後、茅原崑山に私淑する。長青年は雪山と号したが、崑山にあやかったようである。大正9年には東京毎日新聞の編集監督となる。民主主義論争の先駆けとなり、大正、昭和を通じて在野のジャーナリストとして活躍した。

大正5年5月25日

花井法学博士を錦町の私邸に訪う



五月二五日午前九時 (注1) 藤中正君と

至誠動天地とは伊東聖海元師(注2)ノ花井先生に贈られし篇額なり。六法全書、法律集の集えるいかめしき応接間にて面会の榮し給う。先生曰く、「公開演説をやり社会に訴うも一利あり。文部省に押し寄せ責任を問うも一利あり。しかしてこの事件の解決を計るや政治家も必要なし。この後援会発起人の内には、政治、法律家の多きを見るが、大体の意見は医学大家により決せらるるものと思う。幸い本県よりは、呉(注3)、富士川(注4)、永井諸先生ある事なるゆえ、紹介するから諸先生の意見を聞き、しかる後またはご訪問下さい。できることなら大いに尽力する考えである。かく申せし次第にて、誠に姓名を事大きく揚げて云々するのは余のもつとも忌むところであるから、この事は宜しく了解をしておられたし。先生に会ったら取るべき方針、今後の意見、各諸君の処置如何をよく聞きて置きなさい。」

(注1)日本医学専門学校2年生、広島県出身 (注2)伊東佑亭(いとうゆうこう)：鹿児島出身。海軍元帥(1843～1911) (注3)日清戦争における連合艦隊指揮官で清国海軍を破った。 (注4)呉秀三(後出) (注5)永井潜(後出)

花井卓蔵(1868.7.31～1931.12.3)：広島県三原市出身。明治21年に英吉利法律学校(現中央大学)を卒業し、弁護士となった。足尾鋳毒事件や大逆事件における弁護を担当し、人権派弁護士として明治、大正

時代に活躍した。また、衆議院議員として7回当選し、大正5年当時は衆議院議員であった。明治42年には私学卒業生として初めて法学博士を授与された。東京医学専門学校開校10周年の祝賀会には花井卓蔵が来賓として挨拶をしている(東医50年史)。

帝大教授、呉医学博士

新花の私邸に訪う



「実はあの学校に私も少し教鞭をとって居たこともあるので、どうかできればいと同情いたしております。今度の件につきましてこの血涙録主意書を今拝見いたしました。これにより私はできうる限り尽

したいと思っております。しかし私は甚だ多忙でまた官名ある故、十二分の尽すことは出来んかしらんが、名の速収下さること決してはばかりいたしません。かかる件の案件は富士川君にお聞き下さい。」<sup>(注1)</sup>

(注1)富士川游(後出)

呉秀三(1865.4.14~1932.3.26)広島藩御典医・呉黄石の三男として江戸に生まれる。東京帝国大学医学部卒業。同校の精神科初代教授に就任し、日本における精神医学の草分けとなった。森鷗外や富士川游と親しかった。三宅鉞一(後出、三宅秀の息子)は弟子。

大正5年5月27日

帝大教授 永井医学博士を帝大生理教室に訪う

五月二七日午前十一時 藤中正君と

「私は学校には少々関係もあるので常に新聞または人より伺って同情いたしており候。私が磯部であつたら元より責を負い社会にわび五百の学生のため、社会のため、何とか済みたいと存じ候。同情にはたえませんが、何しろこの間少しあることを研究しとるし、多忙では尽しすることも出来ず、また意見も出しえませんで。明日は信州へ参りますでいろいろと考えた上で何とか様子申し上げましょう。」

永井潜(1876.11.14～1957.5.17)広島県賀茂郡竹原町(現竹原市)出身。福山誠之館をへて、東京帝国大学医学部卒業。大正4年に東京帝国大学生理学初代教授就任。

大正5年5月30日

茅原崑山先生を大井の里に訪う

五月三十日午後二時

(注1) 江並(君と)

波いと静けき品川より緑なすところより台場をはるか見て、京浜電車に乗り立会川に向かう。遠くは

房総の連山雲煙にあり。近くは初夏の木立点二点と濃く淡く緑を出だす。都に近く乗客の往来はいと繁し。またたく暇に立会川停留所にはつきぬ。春をなごりし桜花物えがおに入江の藻草ふらふらと浦風心地よく。まねきしいおり生垣のここは何処ぞ大井の里の客人、崑山先生の宅とぞありける。

平卒観とは唐人の(注2)黄興の作にて、いと世にまれなる額とや聞きけん。ああ、これにてぞありけるか。あの額こそは、米華先生のものしたまうが。この額こそは西都の公卿学望先生の己章もかくやありける。床には名だたる人の筆のすさび、いとあげやかに見受けらる。白ばらの一輪、先生の評価如何やと思受けらる。先生は『洪水の後』の主筆。何やら和漢洋の書籍いりみだれたるも学者、芸術家かくや思わる。先生は極めて平凡的の書生をよく解したまう。

先生曰く、「今日の新聞を一寸見たが、磯部は九千円云々を法廷に争わんか。かくとあつては、サギさにあらずして何ぞや。驚くの他なし。かかる、実に重大問題を市民の対岸さるるや。世は暗である。吾国の前途をあやしむ者である。」

(ここで、茅原崑山は長ら(注3)に加藤高明男爵、後藤新平男爵への紹介状をしたためてくれた。)

拜啓　ご無沙汰申上、愈々御清適と奉存候。日本医専の件ハ兼ねて御聞き及の御事と存候。

此問題の裡面には極めて痛切なる生活問題為之、若し文教当局の処置一步を過まれば其余勢の迸る処、何辺に赴て少々知くこる程に有之候。学生等は山根理事長の同志会(注4)に属するといふを以て、動

もすれば同志会に赴くは躊躇よる模様も有之候が、此問題は因より以而堂派問題と毫末も関係なきものに有之。殊に政府が援助する同志会の助力を仰ぐは当然なりと申し候。伏して願くは学生の代表者には引見被下、委曲お聞き取り被下、学生の前途を過らぬ様、御訓諭且御斡旋被下度、独り学生の為の幸のみならずと存じ候。

先は各々願まで。

早々 頓首

五月三十日

茅原生

加藤男閣下

御曹

拝啓 日本医学専門学校の件、兼ねて御聞き及の御事と存じ候。此問題の裡面には痛切なる青年の生活問題有之候。何卒、代表者御引見被下、委曲御聞き取り被下度奉願候。

草々 本

五月三十日

後藤男爵閣下

長 迂生

(長島隆次殿)  
(注5)

「誠に社会の目なりたる新聞紙の平然たるは、じつに慨嘆すべきである。諸新聞の同志会(注6)に買収せられたるや明なるも、彼と是には大に異なるべきである。己れも来月16日には此度は少し美しき雑誌を出す考えである。是れにはうんと檄文、論説を書くはずである。後援の援助を仰ぐのは加藤男が一番といと思う。此問題は決して政堂で争そう可きものでない。それは尤後の問題で、今後は々と申すは諸君のために無理である。殊に加藤はよく学生を解する同情すべき人である。僕は良く知っているから証介しよう。後藤男これば同志会とは反対の人である。大なる野心家である。只これは先生にかかる問題を紹介して参考とさせる位のものである。男とは僕との関係はないが紹介してみよう。長島君もこれしきの人である。現内閣で学生を解し同情の人物は高田(注7)と尾崎(注8)大臣である。尾崎大臣には先日紹介しておいたが大いに言つて泣いて願うのである。僕が無一文であるから富豪は知らない。

とにかくまだ話したき事もあるがここ大井の里を散歩せんか。新しい卵のご馳走をする。その上で紹介状をたんと書く。さあ行こう。」

景色たえなる夏心地のいい堀を沿い、卵屋に至る。「ここは夏なんか非常に心地がいい。春もここは



一帯の桜がなかなかいいよ。第一、空気がいいわね。鼻、咽喉、肺などはいいそうだが、頭痛にはよくないてね。空気は重いようである。」

先生卵をたいらげる。3つ。小生らは2つ。ここにお茶を召し上がれと塩せんべいを出したるの、いとあやしき二九の乙女ありける。文士はあやしき男というべきか。先生又曰く「自分は今年四十と七であるが、しかし心はなかなか若い。そして若き人を解する。十七、八の女にかたり、実にいずるが如き真理を発見し、これにうなずく思いでありき。思わんとおもいき、言わんとしてかたる苦しきと果てし。」「二八の女とはこの人なりしか」と榎並君。「ハハハハハ。」たまたま二卵のありけるを見て先生曰く、「昔は子なければ去るであつたが今は子あれば去るである。明日はこの学校で演説会があるが、おれはこれをひとつ言ってみよう。ハハハハハ。」談こもこもと移り移りて、「実は日本医専の問題はよく時代思想を表していると思う。美術学校の教授、湯原元一氏もパン問題云々いつていたが実にそうである。僕はよく社会主義的事を研究しているが、一体社会主義云々は当局よろしく取り締まるよりこの方法をつけやらねばならないのである。社会主義には上より起るのと下より起るのとある。近ごろ英国ネルソンの社会主義を読んで研究して居る。これはそれである。どれ少し待ってくれ。紹介状を書くから。」と先生は奥の文の机に……。

ここに四時半先生と暇をとり夕風いと心地よく。品川湾頭、百帆を見ながら散歩し。鈴が森に至りぬ。ああ、思い出しぬ東海道五十三次をこのやかましき宿を。ああここが鈴が森である。恐魂何時の日

か馴染まん。ああ、思い出多き彼と是と。苔むす石に。

辞世

照月

散るをおしまぬ

山の櫻花

ここ一带にあやしきもの一つ。砂風岩甚だ多き村。一带あたたむるの暇なく。大森の濱の真砂に別れおしみて。海岸より電車に乗りここは高輪泉岳寺に帰り、義魂四十七士の墓に手向けぬ。ああ何れ線たゆるの時なきか。

前日本医学専門学校学生団の名紙を扉に掲げた。沈自して見る。

(注1)江並猛 日本医学専門学校1年生、宮崎県出身。(注2)黄興 中華民国初代副大統領(注3)加藤高明(1886.1.25 ~ 1936.1.28) 愛知県出身。山根正次と同じ立憲同志会。大正5年10月より大隈重信の後を受けて内閣総理大臣となった。(注4)後藤新平 岩手県水巻出身。内務省をへて、初代満鉄総裁、東京市長など歴任。(注5)長島隆次 後藤新平の女婿(注6)立憲同志会(注7)高田早苗文部大臣(注8)尾崎行雄 のち憲政の神様といわれた。

大正5年5月30日

第三回公開演説 本郷大和座にて

五月三十日 午後五〜十二時

東洋大学講師 高島米峯先生



「諸君が折角志を立てて笈を負つて意気揚々と郷関を出て今、さめざめと如何にしてか老親にまみえんや。諸君が錦旗を翻やし帰ると郷人に送られ今敗旗に如何にしてか古仏の地を踏まんや。実に同情の余りである。まして地を遥かにせる日夜、諸君の事、感動の暁を夢みておらる両親のご心中を思うに余りあるのである。実にこの問題の裏面には惨憺たる事情を含んでいるのである。何故に文部省は一日も早く処置をせざるのであるか。この正義の五百の学生を救う事もせねば野心家学校屋の処置をせず甚だ緩慢といわなければならぬ。文部省当局がいうとおり、直接の学生、官立の学校の学生のことなら2、3名のことでもすぐ解決するのである。然るに私立だからの何の、私立であるから責任なき。早く解決つけぬという法か、道が何処にある。じつに畏くも一天幕上の大御心にそむくものである。昔より文部

省はどうも官舎が無いと同じように古い思想で困る。まさかやっただと思えば、又すぐ人がでて取り消しだの修正だのやって困らせる。一例申せば、仮名使いこれである。今度はこれこれである。何とかと樺で子供を苦しめるのである。

また、西久保総監は中々偉い人と承っていたが、如何なる理由なるか。正義の叫びの五百の前途有望の学生に矢をはなち、一人もしかも、不義の偽教育者、蓋し老巧者を保護するに至たりては言語同断の至りである。

故にここは大いに社会に訴えなければならぬ。諸君、近時一人の生徒を過ちて殺したりと実到大問題となり云々するに、この五百の学生の死活問題を何故市民は叫ばないでありますか。諸君、小守壮輔拷問事件は一人の事で人権問題なりと天下の人心をさわがして居るに、五百の人権は何故に天下の人が問題とせないのがありますか。これは只に五百の学生の運命のみではありません。これに関係する父母、兄弟、姉妹。例えば一家に五人としても実に二千五百余名の運命に関することあります。しかして、この五百の学生が皆医師となり、たとえ三十より六十まで三十年働き、日一人の医師が十人の患者を救うとして、月には三百人、一年には三千六百五十人余。三十年に十万六千余。五百人にては驚くなかれ、五千四百何十万と。六千万の人口を有する我が国の五千何百万の人を救済するのであります。かかる点よりしてもこの問題たるや国家の問題であります。要するに諸君、彼と是を良くお考え下さって、正義の叫び、五百の学生の援助して救情下さらんことを切に希願するものであります。云々。」

高島米峯(1875.1.15～1949.10.25) 新潟県出身。哲学館(現東洋大学)卒業ののち、仏教書、哲学書の刊行をおこなう。島田三郎(後出)、江原素六(後出)とともに郭清会を設立し、遊郭の廃止を訴える。明治43年より東洋大学学長。

市会議員、弁護士、笠原文太郎氏



「諸君、神田区が法学生の如く、本郷区と申せば医学生を思うのであります。この本郷区民が五百の学生の生活問題に対し、対岸視されとるは甚だ遺憾と存じます。私は学生を殺すものは官僚主義と題し論じてみようと思ひます。学生の意気を静めるものは試験であります。勿論、一定の志願者に対し、一定の募集人員に対し試験は必要であります。さらば官公私立の別なく何故に平等にやらないのでありますか。日本平民をして同じ赤心をして一人は継子扱いに、一人は大事に奔走子にするのでありますか。甚だ非道といわなければなりません。誠に医学生はこの継子扱いにされて居るのであります。現在東京市の医師は7万人以上居るのであります。この医者は明治6年に制定されたる医学開業試験を受けられ、また明治39年の医師法により医師となられたるものであります。明治6年の規則は平民的でありましたが、39年の医師法は頗る官僚的に出来たるものであります。これによると、帝大出身、専門学校（指定）および医師法による試験に及第したるもの三通りでありまして、世の開けない明治6年の法よりも開化の進んだときの法のほうが遙かに劣つて居ると考へるのであります。実にこの五百の学生は志を立て、社会の人を救わんと麗しい精神を有して居られる方でありまして。しかるに偽教育のためかかる問題がおきたと申すことは、甚だ同情に耐えざる次第であります。さらばこの問題は如何にして解決すべきや、甚だ簡であります。曰く、文部省は指定学校にさえしてくればそれで済むのであります。文部当局は專業においても品性においても他の学校より優るとも劣らでただ財団のみと。然もその金たるやただの五万円云々、十万の半分であります。驚くなかれ、この問題は五万の問題であります。この五万

円なければ指定下されぬというのが不思議であります。さらばここには何の原因なからざるや。曰く、理事者云々と。然らば磯部先生は五百有余の前途有望なる学生のため、国家を思わゆるならば、犠牲となつてもらいたい。人の大切な子弟を預かり然も教育家として自分の学生と法廷に争うなんかときては如何に人格の下劣と呼ばざるを得ないのであります。学校なるものは国家文教の道德の根源の胚胎たるところであつて、営利云々のあるべきものではないのであります。金が欲しいならば、高利貸となり、或は兜町にお働きなさるがよい。学校を理にして営利をむさぼるなんか思の外であります。先生にして、医者様にして二一天作の五を以つてしてもらつてはならないのであります。この立派なる大切な医学生の上に立ち、しかも教育者がかくあるとは宜しく社会に対し自分の立場を明にして責を充分負うのが当然に、蔭に退きたるとは甚だ解することが出来ません。宜しく醒めよ市民、本郷区民諸君は五百の学生が方向に迷い、昨日はあちらに、今日は官途に訴う、その心情を思いやられ、正義のためご尽力あらんことを祈るのであります。学生諸君も今日の社会は法学とともに甚だ困難であらうと思つて。前途是多忙であるから多大の努力を要するのである。この公明正大の意思を達するやこの立憲をやつてはならぬのである。正々と堂々と社会に訴え、天下の名士に、各政堂の本部に後援をもとめ、大なる労をおしんではならないのである。尚、一言したいが、医士は益多きを願うのである。伝染病予防など大いに医者欲するのである。諸君大いにおやりなさい。日本のみならず、支邦人、南洋の人までも手を挙げ待つてゐるのであります。故に、諸君は自重して根気強く目的を達せられん事を。諸君を愛せぬ者は一

人もないのであります。」

## 二十世紀の主筆 森川国南先生

「諸君、今や教育界の一大中心となれる日本医専門題として磯部検三なる者を論じてみようと存じます。磯部検三は諸君御承知通り、すこぶる風采の揚らず、陰險陋劣の人であります。随分その性質も陰險陋劣、詐欺偽教育者ということが出来るのであります。山口県人で医者となり、青貧なる一書生より然も空拳でかかる学校経営したのでありますから、如何なる策略をとり虚偽をし来りし事は凡そ想像が出来るのであります。磯部は教育家として学校屋として実に価なき動物であります。教育という美名の下に文教を腐敗する。青年の前途を惨憺たらしめ、青春を泥土よりも軽く蹂躪し学生を落とす。曰く、陳陰、羊頭を掲げて狗肉を売る者であります。諸君正義のため正々と然も最後の五分間に力をこめ目的を達せられんことを。万堂の諸君は学生に同情下さってご勢援あらんことを願う次第であります。」



慶大教授、向軍次先生(空白)

大町桂月先生(空白)<sup>(注1)</sup>



(注1) 本名は大町芳衛。高知県出身。東京帝大国文科卒業後、文筆業に専念。紀行文、随筆は名文と評価が高い。福本日南と懇意であった。「奮闘の半年」に本講演会において大町桂月が模範ストライキと激賞したことが記載されている。

5月31日

男爵加藤高明氏を(麹町下二番町)訪う



山本秘書官代わって聴取す。